



## 9 半魚人と人魚の恋（海王星）

---

やっと見つけた。やっとだ。体がぼろぼろになるまで、何年間もかけて、この海王星の七つの海を泳いだ。だが、見つからなかった。それでも、俺は、再び、七つの海に向かおうとした、そんな矢先に、彼女に出会ったのだ。彼女は大海原の中のちっぽけな岩礁に体を横たえていた。その岩場は、俺がスタートして間もない場所だった。人魚を探し出すために七つの海を渡るという意気込みが強すぎて、彼女がいたことに気付かなかった。そう、青い鳥ならぬ、白い肌の人魚はすぐそばにいたのだ。

俺は彼女に近づこうとした。だが、体はストップモーションのように動きが止まる。はっと息を飲む。美しい。こんなに人魚が美しいとは思わなかった。あまりにも神々しくて、近づくところか、声を掛けることさえもためられた。彼女の前で膝まずくしかない。俺は彼女のために七つの海で探し求めた巨大な真珠を、言葉もなく恭しく差し出す。膝が尖った岩場に触れる。その痛みさえも、彼女の前では無に等しかった。

彼女は俺の方に顔を向ける。目元は細くなり、口角があがる。頬にうっすらとえくぼが生まれた。拒否はされていない。しばらく、互いに見つめあう。すると、彼女が手を差し述べてきた。俺は真珠を彼女の手のひらに置き、俺の手で彼女の指を丸めた。彼女は伸ばした手を胸のあたりに戻すと、再び、指をゆっくりと開く。指の隙間から月の光が差し込む。その度ごとに、真珠は七つの色に変化する。指が開ききった時、彼女の美と真珠の美が一つになった。俺はまぶしさのあまり目を閉じた。だが、まぶたごしに光を感じる。俺は、喜びを噛み締めながら、再び、目を見開いた。彼女が俺を見つめている。俺も見つめ返す。言葉がなくても、心が通じた瞬間だ。

生まれた。俺たちの愛の結晶が生まれた。それも双子だ。彼女は出産を終えた後、大事業を成し遂げたという感動からか、ぐったりとベッドに横たわりながらも、満足そうに微笑んでいる。

「ふぎゃー」

「ふぎゃー」

生の発動。生まれたことへの喜びなのか、これから歩む人生への不安なのか。どちらにせよ、生まれたのだ。そして、泣き声までもが双子だ。

「お父さん。生まれましたよ」

看護師に促されるまま、ベッドで横たわる彼女の側で、双子の赤ちゃんを抱く俺。ただし、その赤ちゃんの顔を見て、自らの顔ひれ、手ひれ、背ひれ、足ひれに至るまで、体中が硬直する。

真実を確かめることが果たして良いのかどうかを心の中で葛藤しながら、震える指でくるまった赤ちゃんの毛布をめくる。時間が止まった。体の中を流れる血が逆流し、口から嘔き出るような気がした。

「あなた。あたしの、あたしたちの赤ちゃん、赤ちゃんたちは？」

ぐったりとベッドに身を投げ出していた彼女が目を見開いて、二人分の体を包む大きな白い毛布を抱く俺の顔を見つめる。彼女の声聞いて、ようやく時が動き出した俺。だが、その声に、どう反応していいのかわからない。

「会わせて」

彼女の頬笑みは顔中、体中に溢れている。電池が切れかかったおもちゃのように、俺はぎこちない動きで抱っこした毛布を彼女の方に向けた。

そこには、俺の半魚人の顔と彼女の人魚の顔の赤ちゃんが目をつぶっていた。毛布からは彼女の人魚の尾ひれと俺の半魚人の二本の脚がはみ出していた。